様式第２号

平成２５年度　　独 創 的 研 究 助 成 費 実 績 報 告 書

平成２６年　３月３１日

<table>
<tr><td>申　請　者</td><td>学科名</td><td>看護学科</td><td>職 名</td><td>助教</td><td>氏 名</td><td>山下　亜矢子　　印</td></tr>
<tr><td>調査研究課題</td><td colspan="6">看護学生における携帯依存傾向に関連するストレス要因のモデル検証</td></tr>
<tr><td>交付決定額</td><td colspan="6">200，000円</td></tr>
<tr><td rowspan="3">調査研究組織</td><td colspan="2">氏　　名</td><td>所属・職</td><td colspan="2">専門分野</td><td>役割分担</td></tr>
<tr><td>代表</td><td>山下亜矢子</td><td>保健福祉学部・助教</td><td colspan="2">精神看護学</td><td>研究計画，データ収集・分析，研究総括</td></tr>
<tr><td>分担者</td><td>渡邉久美
山口三重子
杉村寛子</td><td>保健福祉学部・准教授
保健福祉学部・教授
保健福祉学部・准教授</td><td colspan="2">精神看護学
基礎看護学
英文学</td><td>研究計画，データ収集・分析
研究全般のスーパーバイズ
翻訳，専門的知識の提供</td></tr>
<tr><td>調査研究実績の概要</td><td colspan="6">本研究の目的は，日本における看護学生のストレスと携帯電話依存傾向の関係，携帯依存傾向とソーシャルスキルとの関係を明らかにすることである．今回，平成24年度の研究結果について基づき，まず，看護学生特有のストレスの現状を把握するために，Staffordshire大学Fiona Irvine教授を代表とする研究者との共同研究により，Watsonらに開発されたStressors In Nursing Studentsを基にした平成24年に研究者らが作成した日本語版看護学生のストレス尺度（SINS-J）の信頼性，妥当性の検証を行った．その次に看護学生の携帯依存傾向に関連するストレス及びソーシャルスキルについて明らかにし，看護学生の携帯依存傾向を軽減するためのメンタルヘルス支援について検討を行った．
1．研究方法
平成25年4月～8月に中四国地方の公立看護大学2校の1～4年の女子520人を対象にアンケートを実施した．調査項目は，①基本属性，②携帯電話依存尺度(土本，2006)，③成人用ソーシャルスキル自己評価尺度(相川，2005)を設定した．分析方法は，単純集計と各尺度を手順に基づき得点化した．SINS-Jの信頼性，妥当性については平成24年度に実施した看護系大学3校における女子看護学生1から4年生までの288名のデータを追加し，確認的因子分析を行った．携帯電話依存得点については，四分位にて，上位25%群(高リスク群)と下位75%群(低リスク群)の2群とし，各尺度についてMann WhitneyのU検定を行った．携帯電話依存傾向に影響を与える要因を明らかにするために，携帯電話依存得点を四分位にて分け，上位25%群(高リスク群)と下位75%群(低リスク群)を従属変数とし，ソーシャルスキル尺度・SINS-Jについてはその下位尺度を独立変数として2項ロジスティック回帰分析（</td></tr>
</table>

次頁に続く

調査研究実績の概要	ステップワイズ法)を行った．分析には統計ソフトIBM SPSS Statistics version21及びAmosを用い，有意水準は$p<.05$とした． 倫理的配慮として，研究実施前に岡山県立大学倫理委員会にて承認を得ている． 2. 結果及び考察 質問紙は520部配布し，270人(回収率51.9%)より回答を得，有効回答217人（80.3%)であった．平均年齢は19.8±1.3歳(18～29歳)，携帯電話の所持状況は，スマートフォンが196人(90.3%)，従来の携帯電話が21人(9.7%)であった．携帯電話を介した非言語的な連絡手段として，メールよりLINEを使用する人数は194人(89.4%)，それ以外は23人(10.6%)であった． 1）日本語版看護学生のストレス尺度（SINS-J）の信頼性，妥当性の検証 分析対象は平成24年度と平成25年度の対象者から欠損値を除いた479人をとした．SINS-Jの23項目が4因子構造となることを確かめるために，Amosを用い確認的因子分析を行った．4因子からそれぞれ該当する項目が影響を受け，すべての因子間に共分散を仮定したモデルで分析を行ったところ，質問項目の「臨床実習における行為の流れが中断されること」，「配置されている病棟でのスタッフとの対立」，「友人や家族と十分な時間がもてないこと」，「家族との関係」の修正指数が高値を示した．そこで，この4つの項目を削除したモデルで再度分析を行ったところ，適合度指標は$\chi 2$ =1343.63，df = 372，p < .001，GFI = .822，AGFI = .791，RMSEA = .074と，最初のモデルよりもデータに適合した結果が得られた．今後，今回の結果をもとに，更に英国の研究者とストレス尺度（SINS-J）の信頼性，妥当性について検討していく予定である． 2）看護学生の携帯依存傾向に関連するストレス及びソーシャルスキルの関係 携帯電話依存得点の高リスク群（136人)と低リスク群(355人)の2群の各尺度について比較検討を行った結果，携帯依存傾向の高リスク群において，ソーシャルスキル尺度の「関係開始」とSINS-Jの「Confidence」「Education」「Finance」が有意に高かった．ソーシャルスキルの「関係開始」は，外交的な，初対面での関係を構築する際のスキルを指す．関係構築が得意である外交的な者は，他者との繋がりも増え，その結果，コミュニケーションツールとして携帯電話を過度に利用してしまうと推察する． 携帯電話依存傾向に影響を与える要因として，年齢と各尺度の下位尺度と自己評価尺度2項ロジスティック回帰分析を行った結果を示す（表1）． 表1　看護学生の携帯依存傾向とストレス及びソーシャルスキルの関係 （偏回帰係数 / P / オッズ比 / 信頼区間 下限 / 信頼区間 上限） ソーシャルスキル：感情統制　-.191　.003　.826　.729　.936 SINS-J：FINANCE　.104　.002　1.110　1.038　1.187 定数　-1.060　.228　.347 モデル$\chi^2 p$ < .01　的中率は74.5% 携帯依存傾向と関連がある要因として「Finance」とソーシャルスキルの「感情統制」が明らかとなった．SINS-Jの「Finance」については携帯依存傾向が高くなると経済的なストレスが増加していた．これは，掲載電話の使用料金による負担もストレスになっていることが推察される．看護学生のストレスである「感情統制」においては，感情を余り面に出さないでいられるといった，自身で感情をコントロールすることが出来るといったスキルであることから，感情統制スキルの高い者は，適切な携帯電話を利用することが出来ると思われる．このことから，看護学生の携帯依存傾向を軽減するためのメンタルヘルス支援として，ソーシャルスキルである「感情統制」のスキルアップを目的としたアサーティブなコミュニケーション方法の習得やアンガーマネジメントなどによる，意図的に自分の感情をコントロールするスキルの習得が求められることが示唆された．

成果資料目録	